

教授就任のご挨拶



鹿児島大学大学院医歯学総合研究科
健康科学専攻発生発達成育学講座
生殖病態生理学分野（産科婦人科）

教授 小林 裕 明

このたび、平成28年4月1日付けで鹿児島大学大学院医歯学総合研究科生殖病態生理学分野（産科婦人科）の教授を拝命しました小林裕明と申します。この場をお借りしまして鹿児島市医師会の先生方にご挨拶させていただきます。

私は宮崎で生まれ育ち、宮崎西高・理数科卒業後は九州大学に進学しました。昭和60年の卒業と同時に同学産婦人科に入局し、2年間の研修の後、大学院（生体防御医学研究所細胞学部門・馬場恒男教授）に進学し、抗がん剤のドラッグデリバリーシステムに関する研究を行いました。大学院在学中にがんの悪性化・転移研究が専門のRobert Kerbel教授の論文を読み、その研究内容に魅かれ大学院卒業と同時に同教授を訪ねてカナダ・トロントに2年間留学しました。平成5年の帰国後からずっと大学勤務で今日に至っておりますので、学外出張は研修医2年目の10か月のみという、医師としては非常に偏った経歴となってしまいました。しかし、毎年新しい教室員と触れ合えたこと、学生勧誘を通して多くの後輩（他科の医師となった学生さんも含めて）と仲良くなったこと、基礎的研究や先進医療に関わられたこと、等々はそれを補って余りあるほどの喜びでした。

留学から帰国後に着手した婦人科がんの研究に関しては、基礎研究としては、抗癌剤耐性機構、血管新生因子、腹膜播種に対する遺伝子治療などの研究を行い、多くの大学院生の学位論文を指導してきました。特に後者の、カルポニンという細胞骨格蛋白質の遺伝子を組み込んだアデノウイルスベクターを腹腔内投与し、がん細胞と腹膜中皮細胞の両面から卵巣がんの腹膜播種の制御を試みるという遺伝子治療の研究成果では、平成16年度の神澤財団医学賞をいただきました。臨床研究としては、子宮頸がんのセンチネルリンパ節の術中生検をもとにリンパ節郭清の省略を試みる試験（2002年～）、浸潤子宮頸がん患者に対する広汎子宮頸部摘出術という妊孕性温存手術の開発に関する試験（2005年～）、ダヴィンチシステムによる子宮がんロボット手術の臨床試験（2013年～）などを行ってきました。前二者の臨床試験に関しては、子宮頸がん患者の術後下肢リンパ浮腫の回避や根治術後の妊娠・出産を可能としたこと、およびそれらの新規医療技術の普及に貢献できたこと、などの成果で医療・介護・教育研究財団から平成25年度ふくおか「医療活動功労賞」を受賞しました。

平成26年4月から、当時教授であられた

〔挨拶〕

堂地 勉教授にお誘いいただき、鹿児島大学へ異動しました。このたび、永田行博前々教授、堂地 勉前教授が築きあげてこられた産科婦人科教室を引き継がせていただくことになったわけですが、光栄でありますとともにその責任の重さに身の引き締まる思いです。

私たちの教室は昭和18年、山下町に開校した県立鹿児島医学専門学校に端を発します。初代の産科婦人科学講座の教授は町野碩夫教授でありました。昭和24年に県立鹿児島大学に統合され、昭和31年に国立に移管し、昭和40年に森 一郎教授が就任されました。昭和49年に現在の桜ヶ丘に移転し、昭和58年に永田教授が、平成16年に堂地教授が就任されました。よって私は5代目となりますが、歴代の“薩摩隼人”でない、頼りない“いもがらぼくと”のせいで、,,と言われたいように全力を尽くして任に当たりたいと思います。

福岡から鹿児島に異動して感じたのが、病院におられる方々の優しさです。患者さんやメディカルスタッフはもちろん、医師でない職員の方々も本当に優しく、医師が“理想の医療”をしやすい環境に恵まれていると思いました。しかしながら、産婦人科医師不足の問題は地方大学においてはより深刻で、当教室も特になん治療を求めて来て下さる患者さんを全て受け入れることが叶わず、関連病院に振り分けて治療を依頼している状況です。一刻も早く教室員を増やしてこの状況を打破し、将来的には産婦人科医不足に悩む鹿児島の各地域へ産婦人科医を派遣していきたいと思っています。ありがたいことに鹿児島には“はやぶさプラン”等々、産婦人科医を目指す医師・学生に対する奨学金などのサポート体制が充実しています。産婦人科の学問・医療としてのやりがいと面白さは、体験すれば必ずわかっていただけだと思いますので、もし先生方の周りに産婦人科に興味を持っている医学生や研修医がおられましたらぜひお教

え下さい。教室の見学にお誘いしたいと思います。

若き産婦人科医が増えることこそが今後の鹿児島の産婦人科医療を救い、発展させていくわけですが、今後始まる専門医機構による新専攻医プログラムが、地方の産婦人科医増加に貢献するかは全く未知数です。すくなくとも“鹿児島の産婦人科研修は充実しているし、専門医になっても素晴らしい未来がある”と感じて鹿児島県のプログラムを選んでいただくことが重要ですので、今回、鹿児島市立病院産婦人科の上塘正人部長に相談して、大学同様、基幹施設の申請をしていただきました。その結果、鹿児島県の産婦人科プログラムは2つの基幹施設からなり、かつお互いが相手の連携施設でもありますので、強固な研修協力体制のもと大きな裾野をもった研修施設の集団（ネットワーク）を形成することができました。このプログラムを選択してくれた研修医たちは自由かつ柔軟な選択肢をもって産婦人科専門医を取得していくこととなります。もちろん、専門医取得後もお互いの病院を行き来するサブスペシャリティ研修も可能としましたので、“オール鹿児島”で産婦人科医を増やす体制ができつつあると思います。

もちろん、私の専門分野である婦人科腫瘍の分野に加えて、周産期医療、不妊内分泌、女性ヘルスケアという産婦人科の4つのサブスペシャリティ分野の臨床と研究の充実も私に課せられた重要な使命ですので、教室員が増えて大学院生が毎年誕生していくような時代を一刻も早く迎えるべく努力して参ります。鹿児島市医師会の皆様には今後ともいろいろとお世話になるかと存じますが、何とぞよろしくご指導ご鞭撻のほどお願い申し上げます。